

月の夜がたり

岡本綺堂

青空文庫

E君は語る。

僕は七月の二十六夜、八月の十五夜、九月の十三夜について、皆一つずつの怪談を知っている。長いものもあれば、短いものもあるが、月の順にだんだん話していくことにしよう。

そこで、第一は二十六夜——これは或る落語家はなしかから聞いた話だが、なんでも明治八、九年頃のことだそうだ。その落語家もその当時はまだ前座からすこし毛の生えたくらいの身分であったが、

いつまで師匠の家の冷飯ひやめしを食つて、権助同様のことをしているのも気がきかないというので、師匠の許可を得て、たとい裏店うらだなにしても一軒の世帯をかまえることになつて、毎日貸家をさがしてあるいた。その頃は今と違つて、東京市中にも空家あきやはたくさんあつたが、その代りに新聞広告のような便利なものはないから、どうしても自分で探しあるかなければならない。彼も毎日尻端折りで、浅草下谷辺から本所、深川のあたりを根こゝんよく探しまわつたが、どうも思うようなのは見付からない。なんでも二間ふたまか三間ぐらいで、ちよつと小綺麗な家で、家賃は一円二十五銭どまりのを見付けようという注文だから、その時代でも少しむずかしかつたに相違ない。

八月末の残暑の強い日に、かれは今日もてくてくあるきで、汗をふきながら、下谷御徒町の或る横町を通ると、狭い路地の入口に「この奥にかし家」という札がななめに貼つてあるのを見付けた。しかも二畳と三畳と六畳の三間みまで家賃は一円二十銭と書いてあつたので、これはおあつらえ向きだと喜んで、すぐにその路地へはいつてみると、思ったよりも狭い裏で、突当りにたつた一軒の小さい家があるばかりだが、その戸袋の上にかし家の札を貼つてあるので、かれはこの家に相違ないと思つた。このころの習わしで、小さい貸家などは家主がいちいち案内するのは面倒くさいので、昼のうちは表の格子をあけておいて、誰でも勝手にはいつて見ることが出来るようになっていた。この家も表の格子は

閉めてあったが、入口の障子も奥の襖もあけ放して、外から家内をのぞくことが出来るので、彼もまず格子の外から覗いてみた。もとより狭い家だから、三尺のくつぬぎを隔てて家じゆうはすっかり見える。寄よりつき付が二畳、次が六畳で、それにならんで三畳と台所がある。うす暗いのでよく判らないが、さのみ住み荒らした家らしくもない。

これなら気に入ったと思ひながらふと見ると、奥の三畳に一人の婆さんが横向きになって坐っている。さては留守番がいるのかと、彼は格子の外から声をかけた。

「もし、御免なさい。」

ばあさんは振向かなかつた。

「御免なさい。こちらは貸家でございますか。」と、彼は再び呼んだ。

ばあさんはやはり振向かない。幾度つづけて呼んでも返事はないので、彼は根負けがした。あのばあさんはきつと聾に相違ないと思つて舌打ちしながら表へ出ると、路地の入口の荒物屋ではおかみさんが店先の往来に盥たらいを持出していたので、彼は立寄つて訊きいた。

「この路地の奥の貸家の家主さんはどこですか。」

家主はこれから一町ほど先の酒屋だと、おかみさんは教えてくれた。

「どうも有難うございます。留守番のおばあさんがいるんだだけ

ども、居眠りでもしているのか、つんぼうか、いくら呼んでも返事をしないんです。」

彼がうっかりと口をすべらせると、おかみさんは俄かに顔の色をかえた。

「あ、おばあさんが……。また出ましたか。」

この落語家はひどい臆病だ。また出ましたかの一言にぞつとして、これも顔の色を変えてしまつて、挨拶もそこそこに逃げ出した。もちろん家主の酒屋へ聞合せなどに行こうとする気はなく、^{ふる}顫えあがつて足早にそこを立去つたが、だんだん落ちついて考えしてみると、八月の真つ昼間、暑い日がかんかん照っている。その日中に幽霊でもあるまい。おれの臆病らしいのをみて、あの女房

め、忌^{いや}なことを言っておどしたのかも知れない。ばかばかしい目に逢ったとも思ったが、半信半疑で何だか心持がよくないので、その日は貸家さがしを中止して、そのまま師匠の家へ帰った。

この年は残暑が強いので、どこの寄席も休みだ。日が暮れてもどこへ行くというあてもない。

「今夜は二十六夜さまだというから、おまえさんも拝みに行っちゃあどうぞだえ。」

師匠のおかみさんに教えられて、彼は気がついた。今夜は旧暦の七月二十六夜だ。話には聞いているが、まだ一度も拝みに出たことはないので、自分も商売柄、二十六夜待^{まち}というのはどんなものか、なにかの参考のために見て置くのもよかろうと思ったので、

涼みがてらに宵から出かけた。二十六夜の月の出るのは夜半よなかにきまつているが、彼と同じような涼みがてらの人がたくさん出るので、どこの高台も宵から賑わっていた。

彼はまず湯島天神の境内へ出かけて行くと、そこにも男や女や大勢の人が混みあっていた。その中には老人や子供も随分まじっていた。今とちがつて、明治の初年には江戸時代の名残りをとどめて、二十六夜待などに出かける人たちがなかなか多かつたらしい。彼もその群れにまじってぶらぶらしているうちに、ふと或るものを見付けてまたぞつとした。その人ごみのなかに、昼間下谷の空家で見た婆さんらしい女が立っているのだ。広い世間におなじような婆さんはいくらかもある。ばあさんの顔などというものは

大抵似ているものだ。まして昼間見たのはその横顔だけで、どんな顔をしているのか確かに見届けた訳でもないのだが、どうもこのばあさんがそれに似ているらしく思われてならない。幾たびか水をくぐったらしい 銚子ちようしちぢみ縮ゆかたの浴衣までがよく似ているように思われるので、彼は何だか薄気味が悪くなつて、早々にそこを立去つた。

彼は方角をかえて、神田から九段の方へ行くと、九段坂の上にも大勢の人がむらがつていた。彼はそこで暫くうろうろしていると、またぞつとするような目に逢わされた。湯島でみたあのばあさんがいつの間にかここにも来ているのだ。彼はもし自分ひとりであつたら思わずきやつと声をあげたかも知れないほどに驚いて、

早々に再びそこを逃げ出した。

彼はそれから芝の愛宕山へのぼった。高輪の海岸へ行つた。しかも行く先々の人ごみのなかに、きつとそのばあさんが立っているのを見いだすのだ。勿論そのばあさんが彼を睨むわけでもない、彼にむかつて声をかけるわけでもない、ただ黙つて突つ立っているのだが、それがだんだんに彼の恐怖を増すばかりで、彼はもうどうしていいか判らなくなった。自分はこのばあさんに取付かれたのではないかと思つた。

月の出るにはまだ余程時間があるのだが、彼にとつてはもうそんなことは問題ではなかつた。なにしろ早く家へ帰ろうと思つたが、その時代のことだから電車も鉄道馬車もない。高輪から人力

車に乗って急がせて来ると、金杉の通りで車夫は路ばたに梶棒かじぼうをおろした。

「旦那、ちよいと待つてください。そこで蠟燭を買って来ますから。」

こう言つて車夫は、その荒物屋へ提灯の蠟燭を買いに行った。荒物屋——昼間のおかみさんのことを思い出しながら、彼は車の上から見かえると、自分の車から二間ほど距はなれた薄暗いところに一人の婆さんが立っていた。それを一と目みると、彼はもう夢中で車から飛び降りて、新橋の方へ一目散に逃げ出した。

師匠の家は根岸だ。とてもそこまで帰る元気はないので、彼は賑やかな夜の町を駈け足で急ぎながら、これからどうしようかと

考えた。かのばあさんはあとから追つて来るらしくもなかったが、彼はなかなか安心できなかった。三十間堀の大きい船宿に師匠をひいきにする家がある。そこへ行つて今夜は泊めて貰おうと思いついて、転げ込むようにその門かどをくぐると、帳場でもおどろいた。

「おや、どうしなすつた。ひどく顔の色が悪い。急病でも起つたのか。」

実はこういうわけだと、息をはずませながら訴えると、みんなは笑い出した。そこに居あわせた芸者までが彼の臆病を笑つた。しかし彼にとつては決して笑いごとではなかった。その晩はどうとうそこに泊めてもらうことにして、肝腎の月の出るころには下

座敷の蚊帳かやのなかに小さくなっていた。

あくる朝、根岸の家へ帰ると、ここでも皆んなに笑われた。あんまり口惜しいので、もう一度出直して御徒町へ行つて、近所の噂を聞いてみると、かの貸家には今まで別に変つたことはない。変死した者もなければ、葬式の出たこともない。今まで住んでいたのは質屋の番頭さんで、現に同町内に引越して無事に暮らしている。しかしその番頭の引越したのは先月の盂蘭盆前で、それから二、三日過ぎて迎い火をたく十三日の晩に、ひとりの婆さんがその空家へはいるのを見たという者がある。

その婆さんはいつ出て行つたか、誰も知っている者はなかったが、その後ときどきに、そのばあさんの坐っている姿をみるとい

うので、家主の酒屋でも不思議に思つて、店の者四、五人がその空家をしらべに行つて、戸棚をあらため、床の下までも詮索したが、なんにも怪しいものを発見しなかつた。

そんな噂がひろがつて、その後は誰も借り手がない。そうして、その空家には時どきにそのばあさんの姿がみえる。どこの幽霊が戸惑いをして来たのか、それはわからない。

その話を聞いて、彼はまた蒼くなつて、自分はその得体の知れない幽霊に取付かれたに相違ないときめてしまった。家へ帰る途中から気分が悪くなつて、それから三日ばかりは半病人のようによんやりと暮らしていたが、かのばあさんは執念ぶかく彼を苦しめようとはしないで、その後かれの前に一度もその姿をみせな

った。彼も安心して、九月からは自分の持席をつとめた。

かのあき家は冬になるまでやはり貸家の札が貼られていたが、十一月のある日、しかも真つ昼間に突然燃え出して焼けてしまった。それが一軒焼けで終つたのも、なんだか不思議に感じられるというのであつた。

二

第二は十五夜——これは短い話で、今からおよそ二十年ほど前だと覚えている。芝の桜川町付近が市区改正で取払げられることになって、居住者は或る期間にみな立退いた。そのなかで、或る

煙草屋——たしか煙草屋だと記憶しているが、あるいは間違っているかも知れない。——の主人が出張の役人に対してこういうことを話した。

自分は明治以後ここへ移つて来たもので、二十年あまりも商売をつづけているが、ここの家には一つの不思議がある。時どきに二階の梯子の下に人の姿がぼんやりと見える。だんだん考えてみると、それが一年に一度、しかも旧暦の八月十五夜に限られていて、当夜が雨か曇りかの場合には姿をみせない。当夜が明月であるとき、きつと出てくる。どこかの隙間から月のひかりが差込んで、何かの影が浮いてみえるのかとも思ったが、ほかの月夜の晩にはかつてそんなことがない、かならず八月の十五夜に限られている

のも不思議だ。人の形ははつきり判らないが、どうも男であるらしい。別にどうするとうでもなく、ただぼんやりと突つ立っているだけのことだから、こっちの度胸さえすわっていれば、まず差したる害もないわけだ。

この主人もいくらか度胸のすわった人であつたらしい。それにもう一つの幸いは、その怪しいものは夜半よなかに出て、明け方には消える。ことに一年にたった一度のことであるので、細君をはじめ家内の人たちは誰もそれを知らないらしい。あるいは自分の眼にだけ映つて、ほかの者には見えないのかも知れないと思つたが、いずれにしても、迂濶うかつなことをしやべつて家内のものを騒がすのもよくない。そんな噂が世間にきこえると、自然商売の障りにも

なる。かたがたこれは自分ひとりの胸に納めておく方がいいと考
えて、家内のものにも秘かくしていた。そうして、幾年を送るうちに、
自分ももう馴れてしまつて、さのみ怪しまないようにもなつた。

ところで、今度ここを立退くについて、家屋はむろん取毀され
るのであるから、この機会に床下その他をあらた検めてもらいたい。あ
るいは人間の髑どくろ體か、金銀を入れた瓶かめのようなものでも現れるか
も知れないと、その主人がいうのだ。成程そんなことは昔話にも
よくあるから、物は試しにその床下を発掘してみようということ
になると、果して店の梯子の下あたりと思われるところ、その土
の底から五つの小さい髑どくろ體が現れた。但しそれは人間の骨ではな
い、いずれも獣の頭であることが判つた。その三つは犬であつた

が、他の二つは貉むじなか狸ではないかという鑑定であつた。いつの時代に、何者が五つの獣の首を斬つて埋めて置いたのか、又どうしてそんなことをしたのか、それらのことは永久の謎であつた。

二、三の新聞では、それについていろいろの想像をかけたが、結局不得要領に終つたようだ。

三

第三は十三夜——これは明治十九年のことだ。そのころ僕の家は小石川の大塚にあつた。あの辺も今でこそ電車が往来して、まるで昔とはちがつた繁華の土地になつたが、明治の末頃まではま

だまだ寂しい町で、江戸時代の古い建物なども残っていた。まして明治十九年、僕がまだ十五六の少年時代は、山の手も場末のさびしい町で、人家の九分通りは江戸の遺物というありさまだから、昼でもなんだか薄暗いような、まして日が暮れるとどこもかしこも真つ暗で、女子供の往来はすこし気味が悪いくらいであった。そういうわけだから、地代ももちろん廉やすく、家賃も安い。僕の親父はそこに小さい地面と家を買って住んでいたので、僕もよんどころなくそこで生長したのだ。

ところが、僕の中学の友達で梶井という男があたかも僕の家の筋向うへ引つ越して来ることになった。梶井の父は銀行員で、これもその地面と家とを法外に安く買って来たらしかった。今まで

住んでいたのは本多なにがしという昔の旗本で、江戸以来ここに屋敷を構えていたのだが、維新以来いろいろの事業に失敗して、先祖以来の屋敷をとうとう手放すことになって、自分たちは沼津の方へ引つ込んでしまった。それを買いつけて、梶井の一家が新しく乗込んで来たのだが、なにしろ相当の旗本の屋敷だから、僕らの家とは違つてすこぶる立派なものであつた。もちろん屋敷そのものは、ずいぶん古い建物で、さんざんに住み荒らしてあるらしかつたが、屋敷の門内はなかなか広く、庭や玄関前や裏手の空地などをあわせると、どうしても千坪以上はあるという話であつた。

前にもいう通り、屋敷はさんざん住み荒らしてあるので、梶井

の家ではその手入れに随分の金がかかったとかいうことであつたが、家の手入れが済んでから更に庭の手入れに取りかかった。その頃は僕も子供あがりで、詳しいことは知らなかつたが、梶井の父というのは何かの山仕事があつて、今のことばで言えば一種の成金になつたらしく、毎日大勢の職人を入れて景気よく仕事をさせていた。すると、ある日曜日の午後だ。梶井があわただしく僕の家へ駆け込んで来て、不思議なことがあるから見に来ていこののだ。

十一月のはじめで、こはるびより小春日和というのだろう。朝から大空は青

々と晴れて滝野川や浅草は定めて人が出たろうと思われうらかな日であつた。梶井が息を切つて呼びに来たので、僕は縁側へ

出て訊いた。

「不思議なこと……。どうしたんだ。」

「稲荷さまの縁の下から大きな蛇が出たんだ。」

僕は思わず笑い出した。梶井は今までしたまち下町に住んでいたので、蛇などをみて珍しそうに騒ぐのだろうが、ここらの草深いところで育った僕たちは蛇や蛙を自分の友達と思っているくらいだ。なんだ、つまらないといったような僕の顔を見て、梶井はさらに説明した。

「君も知っているだろう。僕の庭の隅に、大きいけやき樗が二本立っていて、その周りにはいろいろのぞうき雑木が藪のように生い茂っている。その樗の下に小さい稲荷のやしろ社がある。」

「むむ、知っている。よほど古い。もう半分ほど毀れかかっている社だろう。あの縁の下から蛇が出たのか。」

「三尺ぐらいの灰色のような蛇だ。」

「三尺ぐらい……。小さいじゃないか。」と、僕はまた笑った。

「ここらには一間ぐらいのがたくさんいるよ。」

「いや、蛇ばかりじゃないんだ。まあ、早く来て見たまえ。」

梶井がしきりに催促するので、僕も何事かと思つてついでに行く
と、広い庭には草が荒れて、雑木や灌かんぼく木がまつたく藪のように
生い茂っている。その庭の隅の大きい櫨の下に十人あまりの植木
屋があつまつて、何かわやわや騒いでいた。梶井の父も庭下駄を
はいて立っていた。

この社は、前の持主もちぬしの時代からここに祭られてあつたのだが、もう大変にいたんでいるのと、新しい持主は稲荷さまなどというものに対してちつとも尊敬心を抱いていないのとで、庭の手入れをするついでに取毀すことになつた。いや、別に取毀すというほどの手間はかからない。大の男が両手をかけて一つ押せば、たちまち崩れてしまいそうな、古い小さな社であつた。それでも職人が三、四人あつまつて、いよいよその社を取毀すことになつた時、ふと気がついてみると、その社の前の低い鳥居には「十三夜稲荷」としてした額がくがかけてある。稲荷さまにもいろいろあるが、十三夜稲荷というのは珍しい。それを聞いて、梶井は父と母と一緒に行ってみると、古びた額の文字は確かに十三夜稲荷と読まれた。

妙な稲荷だと梶井の父も言った。一体どんなものが祭つてあるかと、念のために社のなかを^{あらた}検めさせると、小さい白木の箱が出た。箱には錠がおろしてあつて、それがもう錆^{さび}ついているのを叩きこわしてみると、箱の底には一封の書き物と女の黒髪とが秘めてあつた。その書き物の文字はいちいち正確には記憶していないが、大体こんなことが書いてあつたのだ。

当家の妾^{のち}たまと申す者、家来と不義のこと露^あ顕いたし候間、
後の月見の夜、兩人ともに成^{せい}敗^{ばい}を加え候ところ、女の亡魂
さまざまの祟りをなすに付、その黒髪をここにまつりおき候
事。

昔の旗本屋敷などには往々こんな事があつたそうだが、その亡

魂が祟りをなして、ともかくも一社の神として祭られているのは少ないようだ。そう判つてみると、職人たちも少し気味が悪くなつた。しかし梶井の父というのはいわゆる文明開化の人であつたから、ただ一笑に付したばかりで、その書き物も黒髪もそこらに燃えている焚火のなかへ投げ込ませようとしたのを、細君は女だけにまず遮さへぎつた。それから社を取りくずすと、縁の下には一匹の灰色の蛇がわだかまつていて、人々はあれあれといううちに、たちまち藪のなかへ姿をかくしてしまつた。

蛇はそれぎり行くえ不明になつたが、かの書きものと黒髪は残つている。梶井の母はそれを自分の寺へ送つて、回向えこうをした上で墓地の隅に葬つてもらふことにしたいと言つていた。梶井が僕を

よびに来たのは、それを見せたいためであることが判った。一種の好奇心が手伝って、僕もその黒髪と書きものを一応見せでもらったが、その当時の僕には唯こんなものかと思つたばかりで、格別になんという考えも浮かばなかつた。亡魂が祟りをなすなどは、もちろん信じられなかつた。僕は梶井の父以上に文明開化の少年であつた。

書きものに「後の月見の夜」とあるから、おそらく九月十三夜の月見の宴でも開いている時、おたまという妾が家来のなにがしと密会しているのを主人に発見されて、その場で成敗されたのであろう。その命日が十三夜であるので、十三夜稲荷と呼ぶことになつたらしい。以前の持主の本多は先祖代々この屋敷に住んでい

たのだから、幾代か前の主人の代に、こういう事件があったものと思われる。鳥居の柱に、安政三年再建と彫つてあるのをみると、安政二年の地震に倒れたのを翌年再建したのではあるまいか。

それからさかのぼつて考えると、この事件はよほど遠い昔のことではなければならぬと、梶井はいろいろの考証めいたことを言っていたが、僕はあまり多く耳を仮かさなかつた。こんなことはどうでもいいと思つていた。したがつて、その黒髪や書きものが果して寺へ送られたか、あるいは焚火の灰となつたか、その後の処分について別に聞いたこともなかつた。

さて、これだけのことならば、単にこんな事があつたという昔話に過ぎないのだが、まだその後談があるので、文明開化の僕も

いささか考えさせられることになったのだ。

梶井はあまり健康な体質ではないので、学校もとかく休みがちで、僕よりも一年おくれて卒業した。それから医者になるつもりで湯島の済生学舎にはいった。そのころの済生学舎は実に盛んなもので、あの学校を卒業して今こんにち日開業している医者は全国で幾万にのぼるとかいうことだが、あのなかには放蕩者も随分いて、よし原で心中する若い男には済生学舎の学生という名をしぼしば見た。梶井もその一人で、かれは二十二の秋、吉原のある貸座敷で娼妓とモルヒネ心中を遂げてしまった。ひとり息子で、両親も可愛がっていたし、金に困るようなこともなし、なぜ心中などを企てたのか、それがわからない。しいていえば、病身を悲観した

のか。あるいは女の方から誘われたのか。まずそんな解釈をくだすよりほかはなかつた。

僕が梶井の家へ悔^{うち}みに行くと、彼の母は泣きながら話した。

「なぜ無分別なことをしたのか、ちつとも判りません。よくよく聞いてみますと、その相手の女というのは、以前この屋敷に住んでいた本多という人の娘だそうです。沼津へ引つ込んでから、いよいよ都合が悪くなって、ひとりの娘を吉原へ売ることになったのだということですが、せがれはそれを知っていましたかどうですか。」

「なるほど不思議な縁ですね。梶井君は無論知っていたでしょう。知っていたので、両方がいよいよ一種の因縁を感じたという訳で

はないでしようか。」と、僕は言った。「それにしても、梶井君が家を出て行くときに、今から考えて何か思いあたるような事はなかったでしようか。わたくしなどは本当に突然でおどろきました。が……。」

「当日は学校をやすみまして、午後からふらりと出て行きました。そのときに、お母さん、今夜は旧の十三夜です、ねと言って、庭のすすきをひとたば折って行きましたが、大かたお友達のところへでも持って行くのだらうと思つて、別に気にも止めませんでした。あとで聞きますと、ふたりで死んだ座敷の床の間にはすすきが生けてあつたそうです。」

十三夜——文明開化の僕のあたまも急にこぐらかつて来た。

その翌年が日清戦争だ。梶井の父は軍需品の売込みか何かに関係して、よほど儲けたという噂であったが、戦争後の事業勃興熱に浮かされて、いろいろの事業に手を出したところが、どれもこれも運が悪く、とうとう自分の地所も人手にわたして、気の毒な姿でどこへか立去ってしまいました。

青空文庫情報

底本：「影を踏まれた女」光文社文庫、光文社

1988（昭和63）年10月20日初版1刷発行

2001（平成13）年9月5日3刷

初出：「写真報知」

1924（大正13）年10月

入力：門田裕志、小林繁雄

校正：hongming

2006年1月13日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

月の夜がたり

岡本綺堂

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>